

Title	ハンチントン氣候と文明(間崎万里譯, 岩波文庫版)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.185(331)- 185(331)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0185">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0185</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書評

### ハンチントン氣候と文明（間崎万里譯）

地理的環境論は既にギリシャ時代から行はれたものであつて、

かのヘロドトスはエジプト文明の基礎となれる地理的條件を強調し、ツキニディースはギリシャ文明に於ける地理的要素の重要性に對して注意を喚起し、またストラボーとディオドラス・シキユルスも詳細なる地理的知識の重要なことを知つてゐた。近世に入つては、ボダン、モンテスキュー、ヘルデル、バケル等に於てこの環境論の發展を見るのであるが、更にかのラツツエルに至つて人類文化の地理的環境による制約性が最も完備せる體系に於て強調され、環境決定論は一世を風靡した。このラツツエルの學風は更にシンプル及びハンチントンといふ二人の優れたアメリカ地理學者によつて繼承され、ハンチントンは特に氣候の人文活動への影響を説いて世界の地理學界に呼びかけた。所謂氣候史觀を説いた氏の論著は決して二三にとどまらないが、その最も代表的なものがこの「氣候と文明」(E. Huntington: Civilization and Climate, 1915) であつて、本書の學問的價値に就ては茲に改めて喋々するまでもなく、既に學界に定評があり、近世地理學史上に不滅の記念塔となつてゐる。間崎教授による本書の邦譯は既に

大正十一年に舊中外文化協會から出版され、その内容に就ては本誌第二卷第一號に於て松本信廣教授が詳細に紹介して居られる。然し舊版は右協會員の間に頒布されたものであつて、その讀者は極めて小範圍に限定されたが、今や舊譯に若干の訂正が加へられ、完全なる邦譯として岩波文庫に收めて刊行され、我が地理學界に提供されることとなつた。これ寔に學界の爲に慶賀に堪へざるところであり、必ずや地理學徒の間に絶大なる歡迎をうけるであらう。(有賀春雄)

### 日本文化史概說（村岡典嗣著）

本書は「本居宣長」「日本思想史研究」等の著者として、神道史の權威として令名ある村岡典嗣氏の近著である。

氏は本書の序説に於て、文化の意義内容を次のやうに規定してある。

「文化は文明に對してやゝ內的の性質を有する。後者の物質的文明に對して、いはゞ精神的文明といふほどの差がある。隨つてまた、その基調として文明の功利主義的傾向に對して、文化は理想主義的傾向を有する。かくて同じく文明現象としても、外部生活の發達たる法律、制度、産業等の方面を、文明の領域とするに對して、宗教、學問、藝術等のたゞひが、自然文化の主要の題目となり来る傾きがある。」

本書は終點を徳川時代末において五期に分けられてある。即ち太古上古中古中世近世である。著者は明治以後に説き及ばれな